

高市大寺の史的意義

相原 嘉之*

Historical Significance of TAKECHI-NO-ODERA

Yoshiyuki AIHARA

要 旨

奈良・平城京における国家筆頭の官寺は、大安寺である。国家寺院の誕生と展開過程は、国家形成における寺院の役割を考えるうえで重要である。この国家寺院は、百済大寺、高市大寺、大官大寺を経て、大安寺となった。これまでに、百済大寺、大官大寺、そして大安寺については、その場所や伽藍配置などが明らかとなっているが、高市大寺については、その場所すら特定されていない。よって、高市大寺の解明が国家寺院の系譜上重要な位置付けとなる。本論では、高市大寺の位置を、文献史料と考古学成果を踏まえて特定し、その歴史的な意義について検討する。

キーワード：百済大寺、高市大寺、大官大寺、大安寺

I はじめに

大官大寺は国家筆頭寺院で、香具山南方に飛鳥最大の寺院として巨大な伽藍と広大な敷地を占有していた。そこに建立されていた九重塔は、天にまで届くほどの高さを誇り、香具山山頂よりも高かったと推定されている。この国家寺院は、百済大寺にはじまり、高市大寺、大官大寺と法灯をつなぎ、平城京遷都と共に、奈良の大安寺に遷る。このような国家寺院の誕生と展開過程は、国家形成における寺院の役割を考えるうえで重要である。筆者は、我が国における仏教の導入過程と、古代寺院の創建、初期寺院の展開について検討したことがあり、私寺から氏寺への変化の過程を明らかにした。また、伽藍寺院造営前段階として、草堂や単独の仏堂の段階があったことも整理し、出土瓦から、それらの事例を窺うことができることを確認した（相原 2020）。

これまでに、百済大寺、大官大寺、そして大安寺については、その場所や伽藍配置、創建年代などが明らかとなっているが、高市大寺については、その場所すら特定されていない。よって、高市大寺の解明が国家寺院の系譜上重要な位置付けとなる。本論では、高市大寺の位置を、文献史料と考古学の成果を踏まえて特定し、その歴史的な意義について検討する。

II 大安寺前身寺院群の沿革

奈良・平城京にある大安寺は、東大寺ができるまでは国家筆頭の寺院であった。しかし、大安寺が奈良に遷るまでには、その前身となる寺院が複雑に変遷していた。これらの記録は『日本書紀』『続日本紀』及び『大安寺伽藍縁起并流記資財帳』（以下「縁起」と略す）を中心に記されている。両者は記録内容が重なることから、史実を伝えていることがわかり、また互いに補完する形となっている。そこで、大安寺が創建されるまでの沿革を概観する。

『縁起』によると聖徳太子の熊凝寺にはじまるとされ、田村皇子に大寺にするように依頼した。しかし、百済大寺創建は舒明11年（639）まで遅れることから、この記事は後代の仮託と考えられる。百済大寺は舒明天皇の詔として、百済大宮とセットで創建された天皇勅願の最初の寺院である。「西の民は宮を造り、東の民は寺を作る」とあることから広範囲な地域の使役を動員していることがわかり、その規模の大きさも想像できる。その場所は百済川のほとりとあり、『日本三代実録』によると十市郡であることがわかる。また、そこには九重塔が建てられていた。『縁起』には、建立に際して子部社を切り開いたために怨みをかけて、九重塔と金堂の石鴟尾が焼失したとするが、発願から2年3ヶ月で堂塔が立ち上がっていたとはおもえず、発掘調査でも火災の痕跡はない。舒明13年10月に舒明天皇は崩御し、その造営は皇極天皇に引き継がれる。皇極天皇は即位すると、百済大寺造営のために近江と越の人夫を動員し、阿倍倉橋麻呂と穂積百足を造寺司とした。また、大化元年（645）には、恵妙を寺主とする。天智7年（668）には丈六釈迦仏像を安置し、金堂が完成していたことがわかる。この仏像は、後に大安寺金堂の本尊となる。

天武天皇が飛鳥浄御原宮で即位すると、天武2年（673）に美野王と紀臣訶多麻呂を造高市大寺司に任命して高市大寺の造営をはじめた。『縁起』によると「百済の地から高市の地に移す」とあることから、百済大寺の移転を示しており、発掘成果を考慮すると、建物を移築したと考えられる。天武天皇即位と同年にあることから、飛鳥地域への移建措置と考えられる。この高市大寺の場所は、『扶桑略記』によると、「高市郡夜部村」にあり、『日本三代実録』では高市郡高市里にあたる。さらに天武6年（677）には、「高市大寺」から「大官大寺」へと改称される。これは、前年の「新城に都つくらむとす」に対応していると考えられる。天武11年（682）には、140人余を出家させていることから、整備が進んでいると考えられる。天武天皇の病や崩御にあたっては、飛鳥の三大寺・五大寺のひとつとして読経が行われていた。

一方、文武朝になると、大宝元年（701）には造大安寺官を寮に、造塔官を司に準じ、翌年には高橋朝臣笠間を造大安寺司に任命して、大官大寺を大規模に造営している記事がある。『縁起』にも同様の記事があり、九重塔の建立も記される。発掘成果からも大官大寺跡が文武朝造営のものであることが裏付けられた。また、その造営途中で焼失していることも判明したが、『扶桑略記』には和銅4年（711）に焼亡の記事がある。このことから、文武朝大官大寺は、完成をみずに焼失したことになる。このことから、大宝3年（703）の太上天皇のための大会は、高市大寺でのことと推定できる。そして、霊亀2年（716）平城京の左京六条四坊へと遷して大安寺とした。記録ではこれを元興寺のこととするが、所在地からみて、大安寺の誤記と考えられる。

表1 大安寺前身寺院群の沿革

	年 代	記 事 (出典)	
	推 古 29年 (621)	田村皇子、太子より熊凝精舎を大寺にすることを頼まれる (縁起・扶桑)	
百 濟 大 寺	舒 明 11年 (639)	舒明天皇、大宮と大寺造営の詔 (書紀) 百濟川のほとりに、西の民は宮を、東の民は寺を造る (書紀) 百濟川のほとりに九重塔を建立 (書紀・扶桑) 百濟川のほとりの子部社を切り、九重塔を建立 百濟大寺と号す (縁起) 社神の怨みにより、九重塔と金堂の石鴉尾を焼失 (縁起)	
	舒 明 12年 (640)	舒明天皇、百濟宮に遷る (書紀)	
	舒 明 13年 (641)	舒明天皇、百濟宮で崩御。宮の北で殯をおこなう (書紀)	
	皇 極 元年 (642)	皇極天皇、百濟大寺を建立のために、近江と越の人夫を動員 (書紀) 阿倍倉橋麻呂と穂積百足を造此寺司に任命 (縁起)	
	皇 極 2年 (643)	皇極天皇、飛鳥板蓋宮に遷宮 (書紀)	
	大 化 元年 (645)	恵妙法師を百濟寺の寺主とする (書紀) 孝徳天皇、難波遷都 (書紀)	
	白 雉 元年 (650)	丈六・脇侍・八部など36体の繡仏を作る (書紀・縁起)	
	白 雉 2年 (651)	丈六の繡仏などが完成 (書紀・縁起)	
	齊 明 元年 (655)	齊明天皇、飛鳥板蓋宮で重祚 (書紀)	
	天 智 7年 (668)	丈六釈迦仏像ほかの諸像を百濟大寺に安置 (扶桑・元亨)	
高 市 大 寺	天 武 2年 (673)	天武天皇、飛鳥浄御原宮で即位 (書紀) 美濃王と紀臣訶多麻呂を造高市大寺司に任命 (書紀) 御野王と紀臣訶多麻呂の二人を造寺司に任命する (縁起・元亨) 百濟の地から高市の地に寺を遷す (縁起)	
	天 武 6年 (677)	高市大寺を改めて、大官大寺と号す (縁起)	
	天 武 11年 (682)	大官大寺で140人余出家 (書紀・元亨)	
	天 武 12年 (683)	百濟大寺を高市郡夜部村に遷し、大官大寺と改名 (扶桑・元亨)	
	天 武 13年 (684)	天武天皇病のため、群臣百官、大官大寺に詣ず (縁起・扶桑)	
	天 武 14年 (685)	天武天皇病のため、大官大寺・川原寺・飛鳥寺で読経 (書紀)	
	朱 鳥 元年 (686)	大官大寺に封戸700戸を施入 (書紀) 天皇のために観世音像を作り、大官大寺で観世音経を説く (書紀) 五大寺 (大官・飛鳥・川原・小墾田豊浦・坂田寺) で無遮大会 (書紀・元亨)	
	持 統 8年 (694)	持統天皇、藤原宮へ遷宮 (書紀)	
	文 武 朝 大 官 大 寺	文 武 2年 (698)	「大官寺」の塔を建立 (縁起)
		文 武 3年 (699)	文武天皇、大官大寺に九重塔を建立 (扶桑)
大 宝 元年 (701)		造大安寺官と造薬師寺官を寮に、造塔官と造丈六官を司に準じる (統紀)	
大 宝 2年 (702)		高橋朝臣笠間を造大安寺司に任命 (統紀) 太上天皇の為に四大寺 (大安・薬師・元興・弘福寺) で齋会を設く (統紀)	
大 宝 3年 (703)		太上天皇の為に、四大寺 (大安・薬師・元興・弘福寺) で齋会を設く (統紀)	
(文 武 朝)		文武天皇、九重塔と金堂の建立と丈六の仏像を造立 (縁起)	
和 銅 3年 (710)		元明天皇、平城京遷都 (統紀) 大官大寺を平城京に遷す (扶桑・元亨)	
和 銅 4年 (711)	大官大寺並びに藤原宮焼失 (扶桑)		
大 安 寺	靈 龜 2年 (716)	元興寺 (大安寺の誤記) を平城京左京六条四坊へ移建 (統紀・扶桑)	
	天 平 14年 (742)	金堂の穴色菩薩・羅漢像・八部衆、南中門の四天王像を造る (縁起)	
	天 平 19年 (747)	『大安寺伽藍縁起并流記資財帳』を進上	
	神護景雲元年 (767)	高市郡高市里の古寺地西辺の田2町など、大和・撰津・山背の計6町の田を大安寺に献ずる (類聚)	
元 慶 4年 (880)	百濟大寺と「高市大官寺」の旧寺地である十市郡百濟川辺の田1町7段160歩高市郡夜部村の田10町7段250歩を大安寺の願いによって返還 (実録)		

※書紀：日本書紀 統紀：続日本紀 縁起：大安寺伽藍縁起并流記資財帳
扶桑：扶桑略記 元亨：元亨釈書 類聚：類聚三代格 実録：日本三代実録

III 高市大寺の候補地

百済大寺が吉備池廃寺であることが明らかになり、また、大官大寺が文武朝造営であることが判明したことにより、高市大寺の所在地が残された課題となった。

まず高市大寺の候補地を最初にあげたのは田村吉永氏であった。田村氏は史料上の解釈から、大官大寺と高市大寺を別の寺院と理解した。高市大寺が飛鳥浄御原宮遷宮にともない、舒明・斉明天皇の旧宮跡地に建立したと考え、大官大寺東方の小字「大安寺」の位置に推定し、百済大寺を奥山廃寺に推定した(田村 1960・1965)。しかし、これは舒明・斉明の飛鳥宮が石神遺跡の北方にあるという前提であったが、飛鳥宮が伝飛鳥板蓋宮跡にはほぼ確定したことから、根拠がなくなった。さらに小字「大安寺」の立地からは、王宮や寺院中心伽藍があったとは考えられない。一方、飛鳥の中心部に近く、立派な塔基壇や礎石があることを根拠として、奥山廃寺を高市大寺にあてる見解もある(網干 1980)。これらはいずれも発掘調査が実施される以前の推定だが、その後の発掘調査で、奥山廃寺の創建は7世紀前半まで遡ることが明らかにされ(佐川ほか 2000)、平安時代まで存続することが史料にみる歴史と一致しないこと。現在は「小墾田寺」に比定するのが有力視されている(大脇 1997・吉川 2013・小澤 1995)ことから難しい。つづいて候補にあがったのは小山廃寺である。ここでは雷文の軒丸瓦と重弧文軒平瓦が7世紀後半の特徴をもつこと、八条大路に面して薬師寺と対になることを根拠としている(猪熊 1980・森 1998a・1998b・近江 1998)。しかし、伽藍が条坊に規制されていることから、その創建が天武5年以降であることがわかり、伽藍規模が大官大寺に比べて著しく小さいことから、課題が多い。次に候補になったのは木之本廃寺である。木之本廃寺は、山田寺式よりも僅かに古い瓦が出土することから、従来は百済大寺の有力な候補地であった。しかし、吉備池廃寺の調査で百済大寺が確定したことをうけて、高市大寺の有力な候補地となった(木下 2005)。吉備池廃寺と同範瓦が出土することは有力であるが、寺院遺構が未確認であること、そして、ここが高市郡ではなく、十市郡に属すると考えられることが課題となった。これに対して、高市大寺をギョ山西方に推定する見解が現れた。これは百済大寺が木之本廃寺と推定していたことにもよるが、ギョ山西方で、大官大寺や大安寺と共通する瓦が出土すること、さらにこれより古い重弧文軒平瓦が出土することによる(大脇 1995・1998・中井 1995)。これに加えて、文献による検討から「高市郡高市里」の位置を大官大寺の西方に比定し、ギョ山西方とした(小澤 1997・2003・2019)。現在、ここが最も有力視されており、奈良文化財研究所の報告書でもこの立場をとる(奈文研 2003・2017)。このギョ山西方に対して、先の「高市郡高市里」史料の検討から、高市大寺は大官大寺の隣接地ではないことを検討し、新たな候補地として田中廃寺に比定した。「弁天の森」と呼ばれる土壇を塔、「天皇の森」と呼ばれる土壇を金堂とし、吉備池廃寺と同規模の伽藍を想定する(西本 2011)。しかし、この土壇が寺院の基壇跡かは不明であり、特に「天皇の森」は高さが高く、古墳の可能性も指摘されている。さらに出土瓦に、吉備池廃寺・大官大寺・大安寺に共通するものがない点は、大きな課題である。さらに西本氏はもうひとつの可能性として和田廃寺北方も候補とみる。その根拠は和田廃寺で「大寺」墨書土器が出土したことと、吉備池廃寺と同じ型押し忍冬唐草紋軒平瓦が

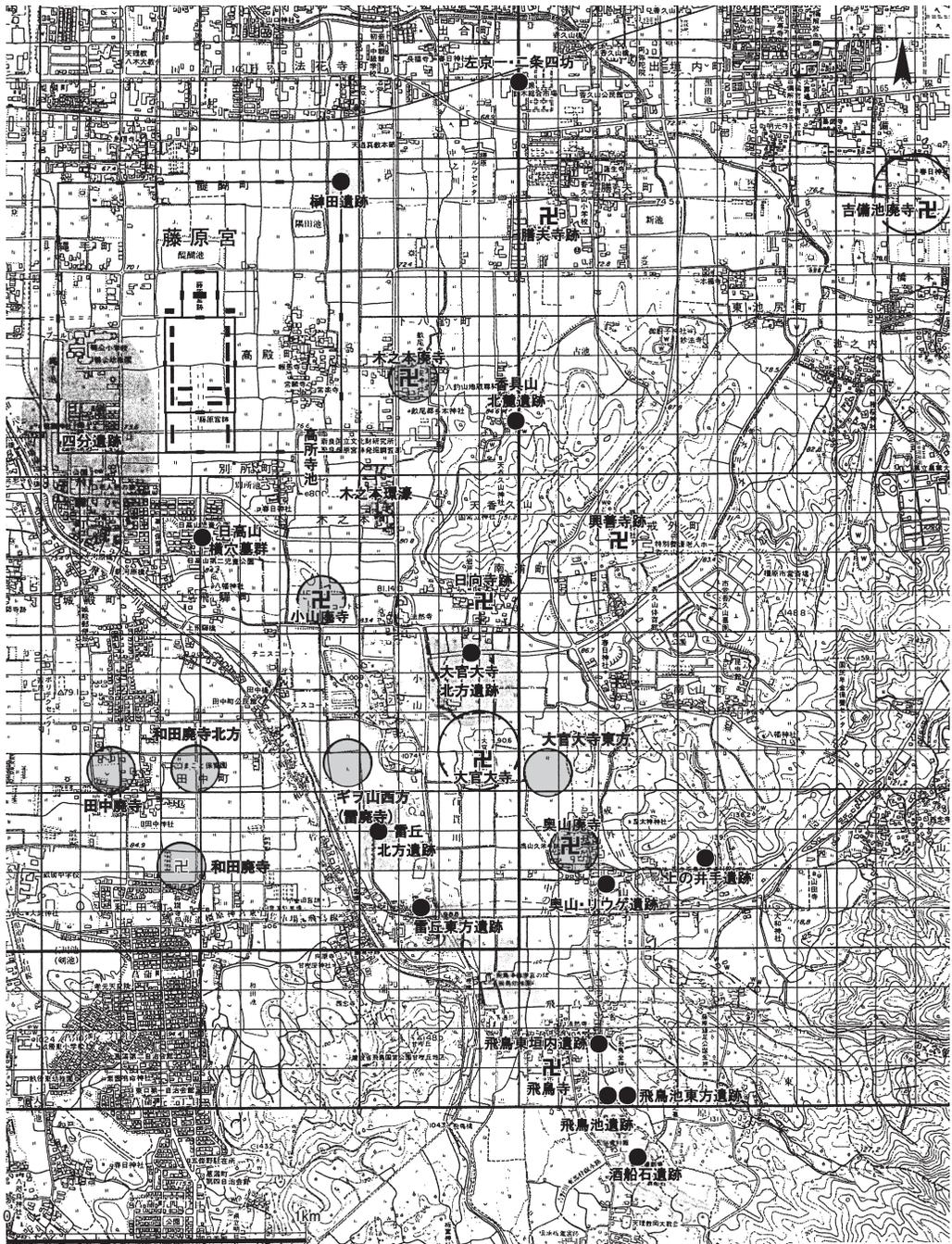


図1 大安寺前身寺院群周辺の遺跡 (奈文研 2017 に加筆)

わずかに出土していることである（西本 2011）。しかし、和田廃寺は葛城寺の可能性が指摘されており、ここから出土する墨書土器を根拠にできないこと。型押し忍冬唐草文軒平瓦もわずかしから出土しておらず、推定される水田地域に土壇の痕跡がみられないことから、ここに比定するのも難しい。

よって、高市大寺の候補地としては、既知の遺跡でみると、ギヲ山西方と木之本廃寺しか可能性は低いと考える。以下では、この両説を中心に検討する。

IV 文献史料上の検討

1 高市大寺と大官大寺の位置関係

まず、高市大寺と大官大寺が近接したかを検討する。すでにみたように、両寺院の位置関係を示す史料に『日本三代実録』（史料4）がある。この史料では大安寺に編入された旧寺地として、高市郡夜部村の田10町7段250歩があり、これが「高市大官寺」の寺地にあたると考えられている。この「高市大官寺」を高市大寺と文武朝大官大寺を兼ねた総称として、両寺院は隣接していた、あるいはごく近接していたという理解がある（星野 1985）。一方、「高市大官寺」を高市の地にあった大官大寺（高市大寺）とみて、文武朝大官大寺ではないとみる理解もある。この理解には、史料1の「高市郡古寺」を文武朝大官大寺に比定していることが背景にある（風間 2010）。

結局のところ、史料4の「高市大官寺」の理解が、両寺院の位置関係に影響を及ぼすことになる。この「高市大官寺」は、小澤氏も指摘するように、文脈からみると、高市郡夜部村に遷して、「高市大官寺」と呼んだとあることから寺名であり、このことは百済大寺の記載と対になることから明らかであり、高市郡にある大官大寺という意味合いではないと考える（小澤 2003・2019）。筆者は高市大寺が天武6年に「大官大寺」と改名していることを踏まえ、「高市大官寺」は「高市大寺改め（天武朝）大官大寺」を表現した名称と理解する方が妥当と考える。ただし、高市大寺と文武朝大官大寺を合わせた表現であるという見解を完全に否定できるものではなく、いずれとも解釈できる。この史料からは、高市大寺と大官大寺の位置関係は確定できないのである。

2 高市大寺の位置

史料4には百済大寺を高市郡夜部村に移して「高市大官寺」と称したことが記される。先にみたように「高市大官寺」が大官大寺を含むかは別にして、高市大寺が夜部村にあることは間違いない。この夜部村の場所は、『日本後紀』に「大宮に向へる野倍の坂」（史料3）が参考になる。小澤氏が指摘するように、ここにある「大宮」とは坂の存在から藤原宮と推定され、「野倍の坂」とは宮正面南側にある日高山丘陵を降る朱雀大路の坂に比定するのが妥当である（小澤 2003）。よって、夜部村は日高山丘陵を含む地域となる。ただし、夜部村の正確な範囲は明確ではない。この夜部村に高市大寺が存在していたことになるが、小澤氏はギヲ山西部を含む範囲とみ、西本氏は田中廃寺・和田廃寺を含む範囲とみた（西本 2011）。先にみたように、大官大寺と高市大寺が近接してあったとする場合、大官大寺も夜部村に存在したことになる。いずれも日高山丘陵か

ら 600 m の距離であり、夜部村の範囲が明確ではない中では、距離の遠近だけで、優位性を見いだすことはできない。なお、このような理解が可能ならば、木之本廃寺も同距離にある。いずれも日高山丘陵からの距離をみれば、候補となり得ると考える。

3 「高市郡高市里」の位置

『類聚三代格』（史料 2）にみえる大安寺に献入された 6 町のうち、専古寺地西辺にある「路東十一橋本田」と「路東十二岡本田」が含まれる「高市郡高市里」とは、どこを指すのであろうか。ここには「専古寺地西辺」とあることから寺域の西辺であることは間違いない。田村吉永氏は、大官大寺の東にあたる路東二十八条四里十一・十一坪の小字「中坪」「ニシノフケ」「大安寺」に比定する。ここは運河（狂心渠）及びその西隣接地にあたるが、西辺ではなく、大官大寺の東辺にあたる（田村 1960）。単純に誤記だけでは片付けられない。一方、小澤氏は路東二十八条三里十一・十一坪に比定し、ここに大官大寺以前の瓦の出土や平城京大安寺と共通する瓦の出土から、大官大寺の寺地が西方にも広がっており、ここに高市大寺を想定している。また、「橋本田」（現

表 2 高市大寺所在地に関連する史料

（史料 1）『大安寺伽藍縁起并流記資財帳』（747 年に進上）

合処処庄拾陸処 庄庄倉合廿六口 屋卅四口

大和国五処

一在十市郡千代郷 一在高市郡古寺所 一在山辺郡波多蘇麻

一在式下郡村屋 一在添上郡瓦屋所

（史料 2）『類聚三代格』神護景雲元年（767）二月一日太政官符

太政官符

合田六町

大和国二町〈一町路東十一橋本田。一町路東十二岡本田。在高市郡高市里専古寺地西辺。〉

右修理金堂内仏菩薩并歩廊中門文殊維摩羅漢等像料

（中略）

以前。被左大臣宣稱。奉勅。件田並永献入於大「寺」安寺。

神護景雲元年十二月一日

（史料 3）『日本後紀』卷一三 大同元年（806）四月庚子条

初有童謡曰。於保美野邇。多太仁武賀倍流。野倍能佐賀。伊太久那布美蘇。都知仁波阿利登毛。有識者以為。天皇登祚之徵也。

（史料 4）『日本三代実録』卷三八 元慶四年（880）一月二〇日庚子条

勅。大和国十市郡百濟川辺田市町七段百六十歩。高市郡夜部村田十町七段に百五十歩。返入大安寺。先是。彼寺三綱申牒稱。昔日。聖德太子創建平群郡熊凝道場。飛鳥岡本天皇遷建十市郡百濟川辺。施入封三百戸。号曰百濟大寺。子部大神在寺近側。含怨屢焼堂塔。天武天皇遷立高市郡夜部村。号曰高市大官寺。施入封七百戸。和銅元年遷都平城。聖武天皇降詔。預律師道慈。令遷平城。号大安寺。今檢兩処旧地。水湿之地。収為公田。高燥之處。百姓居住。請。依実返入。為寺家田。從之。

（〈〉内は割註の文を表す）

（史料 5）「大和国高市郡司并在地刀禰等解案」（『平安遺文三』1134 号）承保三年（1076）九月一〇日付

高市郡東廿四五六七条、以一里為女子分。業房朝臣領、東廿四条二里、同廿五条二里、同廿五条二里、東廿八条一里・二里・四里、十市飼条一里、同廿六条、同廿九条、高市廿九条一二三四里、同卅条一二三四里、同卅一条一二三里等、処分業房朝臣既了。



図2 路東二十六条三里(上)と二十八条三里(下) (1:8000) (榎考研 2019 に加筆)

小字サコツメ)は、近くの飛鳥川に現在も架かる橋があること、「岡本田」(現小字はフケノツボ)は丘陵の裾にあたることに由来する小字名とした(小澤 2003)。

このように、「古寺地西辺」にあたる高市郡高市里に諸説がみられるのは、明確な条里が明記されていないからである。京南条里のうち下ッ道の東に広がる高市郡路東条里の坪番付は記されるが、史料2では条と里は省略されている。このことが、場所の特定を混乱させる原因であるが、この他に「高市郡高市里」を想定できる場所はないのであろうか。そこでもうひとつの可能性として、木之本廃寺を含む路東二十六条三里をあげる。この西辺の11・12坪は小字「ユウカイ」・小字「京トノ」「南京トノ」と呼ばれている。香具山からは350 m程離れているが、「岡本田」の由来とも考えられなくもない。一方、「橋本田」の由来になるような河川や橋はみられないが、この場所は藤原宮東面南門にあたり、門をでると外濠が横たわっていたことから、当然橋が架設されていた場所である。東外濠は、幅5.5～6 mで、「橋本田」の由来になった可能性は否定できないと考える。このように、専古寺地西辺にある路東十一橋本田と路東十二岡本田には二つの候補地が存在し、「高市郡高市里」は路東二十八条三里だけでなく、路東二十六条三里も候補にあがる。ただし、前者は明らかに高市郡に属するものの、後者の場合、ここが高市郡であったことが前提となる。

4 路東二十六条三里は高市郡か

大官大寺を含む路東二十八条三里が、高市郡であることは明確である。一方、木之本廃寺を含む路東二十六条三里は、高市郡と十市郡の境界ちかくにあたる。近世以降は、確実に十市郡に属していたが、郡界ちかくに位置することから、古代においても同様であったかは明確ではない。藤原京左京六条三坊の発掘調査報告書では、調査成果の考察のなかで、調査地の郡域についても検討をしている。その材料としたのが、畝尾都多本神社と喜殿荘関係史料である。

畝尾都多本神社は『延喜式』神名式上6条の大和国十市郡の項に記される式内社で、『古事記』上巻の火神被殺段には、伊邪那岐命が彗諾尊伊邪那美命の死を悲しんで流した涙から「泣沢女神」が生まれ、「香山の畝尾の大本に坐す」という伝承があり、その立地から畝尾都多本神社と考えられている。

しかし、神社はしばしば場所を移動することがあり、左京六条三坊の調査成果から考えても、少なくとも藤原京時代には現在地に同神社が存在しなかったことが、遺構の展開状況からみて間違いない。「香山の畝尾の大本に坐す」は十市郡に属することはわかるが、その場所は現在位置には特定できない。

一方、喜殿荘関係史料のうち、承保3年(1076)9月10日付の大和国高市郡司并在地刀禰等解案(『平安遺文三』1134号)には、条里坪付が記されている(史料5)。この史料には「同廿五条二里」が2度登場するなど、明らかな誤写が含まれているが、最も難解なのは「十市銅条一里、同廿六条、同廿九条」である。大脇潔氏は「銅」を「餘」の誤写と考え、高市郡側に十市郡が食い込んだ土地を指す用語と考えた(大脇 2005)。明治時代の郡界を条里に重ねると、平地部では高市郡路東二十四条一里～三里及び高市郡路東二十四条～二十八条三里となる。前者では横大路が、高市郡と十市郡の境界となっているが、路東二十四条一里が「十市銅条一里」に該当する。

一方、後者では、路東二十六条三里が「同廿六条」に該当し、高市郡側に十市郡が食い込んでいゝる。『報告書』では「高市郡路東二十六条三里に十市郡が食い込む部分こそ、調査地の所在地に他ならない点は見逃せない。このことは、11世紀後半段階には調査地が十市郡に属していたことを示す資料的根拠となるのである」。さらに「郡界は必ずしも固定的なものではないが、調査地に関していえば、十市郡に属することを示す史料はあつても、高市郡に属する史料は皆無である。完全な証明はできないが、8世紀においても十市郡に属したと考えるべきではなからうか。」とまとめている（奈文研 2017）。

しかし、この史料は高市郡路東二十六条三里に十市郡が食い込むことを示す史料であつて、調査地が十市郡に含まれるかは明らかではない。また、「十市飼（餘）廿六条」という表現は、高市郡に十市郡が食い込むのであり、十市郡に高市郡が食い込むのではない。つまり「高市郡路東二十六条三里」の一部に「十市郡路東餘二十六条三里」が含まれているとみるべきではないだろうか。このことは、本来高市郡である里の一部に十市郡が含まれるのであつて、割合的には、その里の中では、高市郡の割合が大きいとみるべきである。

この郡界については中ッ道の南延長線、あるいは木之本街道を境界とする説もあるが、明確ではない。明治期には木之本街道を境界として、一部その東や西にずれている箇所もある。しかし、この場合、里の中で、ほぼ半分の割合となり、主が高市郡なのか、十市郡なのかは不明瞭となる。この三里内には中の川が南北に貫流している。ほぼ直線であることから、地形地物を郡界の基準とみるならば、中の川は有力な郡界ラインとすることができる。この場合、路東二十六条三里の中の川以西は高市郡に含まれる可能性が残されている¹⁾。

V 考古学的検討

1 吉備池廃寺の移建

ここでは発掘調査の成果から、高市大寺について検討するが、まずは吉備池廃寺が移建されたことを考古学の見地から確認する（奈文研 2003）。吉備池廃寺の堂塔や伽藍は、飛鳥時代としては並外れた規模をもつことが判明した、これに匹敵する寺は大官大寺しかない。

しかし、良好に基壇が残存するものの、礎石や塔心礎はまったく遺存していない。またその廃絶の時期は出土土器から飛鳥Ⅳ・Ⅴの時期とみられる。このことは、7世紀後半頃に、石材を抜き取り、解体されたことを示している。また、吉備池廃寺では廃絶後、藤原京の条坊道路（三条大路・三条条間路）が施工されていることが判明しているが、それでも巨大な金堂・塔基壇は土壇として残存していた。

このことは、出土瓦からも窺うことができる。吉備池廃寺の創建瓦は、軒瓦2セットのみで、補修瓦がみられない。また、丸平瓦も同様の状況を示す。これは創建後、長い期間、ここで寺院が存続しつづけたのではなく、比較的短期間に寺院の命運が尽きたことを示している。さらに、吉備池廃寺から出土する瓦は、従来寺院跡から出土する瓦量と比べると、著しく少ない。また、細片が多いことも、吉備池廃寺の特徴である。これは、平城宮へ資材が移された藤原宮中枢部と同様の出土量で、1～2割程度の再利用が不可能な瓦のみが残されたと考えられる。

以上のことから、吉備池廃寺は、比較的短期間に解体され、利用できる資材（木材・石材・瓦等）は別地に移動したことが、発掘成果からも確認できる。

2 ギヲ山西方の寺院の存在

大官大寺西方にあたるギヲ山の西方では、大官大寺式軒瓦のほかに鬼面文軒丸瓦・重孤文軒平瓦や凸面布目平瓦が採取され、「雷廃寺」とも仮称されている。また、以前には礎石が出土したという話もあり、ギヲ山には瓦窯も推定されている。奈良大安寺でも、大官大寺式軒瓦が10%程度出土している。また、重孤文軒平瓦や凸面布目平瓦も少量ではあるが出土しており、ギヲ山西方から大安寺に移動したと推定されている（中井1995）。

ここに7世紀の寺院が存在していたかが問題となるが、大脇氏も課題として示しているが、百濟大寺を移築したにしては、その創建瓦が確認できないこと、広い敷地を確保できないこと、大官大寺との距離が近く、大官大寺への移建理由が見つけれないことをあげている（大脇1995・1998）。

大官大寺の寺域は6町あるが、その中には巨大な伽藍が占めており、僧房や雑舎を含めて、寺院に必要な施設がみられない。建築途中であることを考慮しても、周辺に大官大寺関連施設があっても不思議ではない。特に、ギヲ山南西麓には大官大寺所用の瓦窯があり、筆者も重孤文軒平瓦や焼け歪みのある瓦が出土する炭混じりの土坑を発掘したことがある（明日香村1997）。このように寺域西方にも大官大寺関連施設があったことは間違いないと考える。ただし、現在のところ、寺院遺構が確認されておらず、水田地域に土壇痕跡もみられないことから、現段階では寺院ではなく、大官大寺の関連施設とみておく方が妥当と考える。

3 木之本廃寺の存在

木之本廃寺では百濟大寺と同じ瓦が出土していることから、高市大寺の有力な候補地であることはすでに記した。その後、藤原京左京六条三坊の報告書が刊行され、出土瓦の詳細な報告と検討がなされた（奈文研2017）。ここでは報告内容を踏まえて整理する。

調査地は藤原京左京六条三坊東北・東南坪にあたる。ここでは古墳時代から中世までの遺構が確認されているが、特に関連する7世紀代についてみると、7世紀中頃（Ⅱ期）には東辺の香具山西麓に流れる中の川に該当する大溝があり、斉明朝の狂心渠に比定されている。この西側に南北棟を中心とした掘立柱建物群が展開しているが、集落と考えられる。藤原宮造営期（Ⅲ-A期）になると東北坪の南西1/4に、掘立柱塀で区画された施設があり、京職の施設とも推定されている。藤原京期になると、条坊道路を廃止して、四町利用の左京職になったと考えられている。このように藤原京を前後する時期には、少なくとも調査区内には寺院にかかわる遺構は確認されていない。しかし、調査区内から一定量の瓦が出土しており、その中には鬘斗瓦や面斗瓦など各種の瓦や方形三尊塀仏が出土しており、周辺（北方や西方）に木之本廃寺と仮称する寺院が存在したことが推定されている。

出土瓦は吉備池廃寺の創建瓦である山田寺式をはじめ、雷文縁複弁八弁蓮華文・法隆寺式・藤原宮式・大官大寺式軒丸平瓦のほか、奈良・平安時代のものもある。これらの中でも最も多く出

土したのが吉備池廃寺創建瓦の軒丸瓦1型式と軒平瓦1形式で、範傷も一致し（範傷の可能性がある箇所がさらに2箇所あるが、資料数が少ないことから、明確ではない）、胎土や焼成も類似する。このことは一つの瓦窯から同時に二箇所に供給されたか、あるいは一方から他方へと移送されたかのどちらかの状況を示している。（ただし、範傷の可能性のあるものによると吉備池廃寺から木之本廃寺への変化が考えられる）。また、丸平瓦も、吉備池廃寺創建瓦と共通するものが存在する。さらに小山廃寺所用平瓦等に特徴的な凸面に布目をもつものも一定量出土、大官大寺と同範軒瓦9点、長林寺・法輪寺など斑鳩地域の瓦も3点出土している。

瓦の出土状況を見ると、調査地では東北坪に集中していることがわかる。特に、調査区北半を東西に掘削された東西大溝（SD4130）からの出土が多く、奈良時代以降の中・上層から、藤原宮期以前の瓦と以降の瓦が混在して出土している。このことから藤原宮造営期に東北坪周辺に瓦が集められ、奈良時代以降に東西大溝（SD4130）を中心に投棄されたと考えられている。また、瓦の破片が、吉備池廃寺出土のものより大きいのも特徴である。

このように報告書では、調査地周辺に古代寺院の存在を示唆するものの、寺院遺構が未発見であることと、当地が高市郡に属さないことから、高市大寺の可能性は低く、高市大寺の最有力候補地はギヲ山西に想定している。

しかし、瓦の出土量や種類、釘の残存する方形三尊塼仏の存在は、当地周辺が瓦の集積地ではなく、古代寺院が存在したことを強く示唆している。そして、それが吉備池廃寺創建瓦と共通することから、吉備池廃寺と強い結びつきのある寺院であることを示しており、瓦の残存状態や範傷の進行状況からは、吉備池廃寺の瓦が木之本廃寺に移動したことを推測させる。さらに大官大寺同範瓦も出土することは、木之本廃寺は大官大寺との関連も示唆していると考えられ、藤原宮期までは存続したと考えられる。調査地が藤原宮に近いこともあり、藤原宮式を含めて出土する瓦がすべて、木之本廃寺所有の瓦とは断定でないが、示差的である。また、吉備池廃寺の出土瓦が再利用できない細片が多いのに対して、大型の破片が木之本廃寺では多いことも、吉備池廃寺から木之本廃寺への移動を示している。

このような事象を考えると、木之本廃寺が高市大寺であった可能性は高く、報告書でも示唆していた調査地の郡域についても、先に文献史料の検討を行ったように、高市郡に属するとみて問題はないと考えるので、これまで指摘されていた多くの課題は解消できる。あとは、寺院遺構が確認されることを期待するだけである。

4 木之本廃寺の復元

「木之本廃寺」と呼ばれる古代寺院が存在していたことは間違いがない。しかし、未だ伽藍遺構は未確認であり、この点は大きな課題である。そこで現在ある情報から、木之本廃寺についての復元を試案として提示したい。

まず瓦の出土状況が調査地の北半に集中すること、周辺の小規模な調査でも、吉備池廃寺創建瓦が出土するのは、西南・西北坪であることから、従来も調査地の北から西にかけての地域が推定されてきた。調査地の西方には藤原宮があるので、瓦の分布からは調査地北方が候補地となる。従来の説明では、調査地に北接する「畝尾都多本神社周辺」と記載されることも多いが、調査地

の遺構状況からみて、神社地にも宮造営期や藤原京期の遺構が展開しているのは間違いなく、中心遺構が続いている。地形的にも畝尾都多本神社地は微高地となっており、調査地から続く土地改変とみてよい。よって木之本廃寺は畝尾都多本神社よりもさらに北方にあったと想定できる。

そこで候補としては、現在の下八釣集落及びその北方の水田となる。この周辺での発掘調査は少なく、現在のところ、古代寺院を示すものはみられない。そこで注目するのは寺院遺構の痕跡である。水田地域においては、寺院の基壇が土壇として残されていることがある。吉備池廃寺では金堂及び塔基壇が土壇として残されており、大官大寺でも金堂と塔基壇が遺存する。さらに本薬師寺も金堂及び東西塔が高い土壇としてみられる。つまり、後世の水田開発によっても、堂塔の高い基壇が現地に残されている可能性がある。ましてや高市大寺の基壇となると、吉備池廃寺並の基壇が想定される。しかし、下八釣集落の北方及び西方の水田内には、そのような土壇はなく、寺院の微証は確認できない。

では集落内ではどうか。集落内でも土壇の高まりは確認できない。寺院跡が、現在の寺院や神

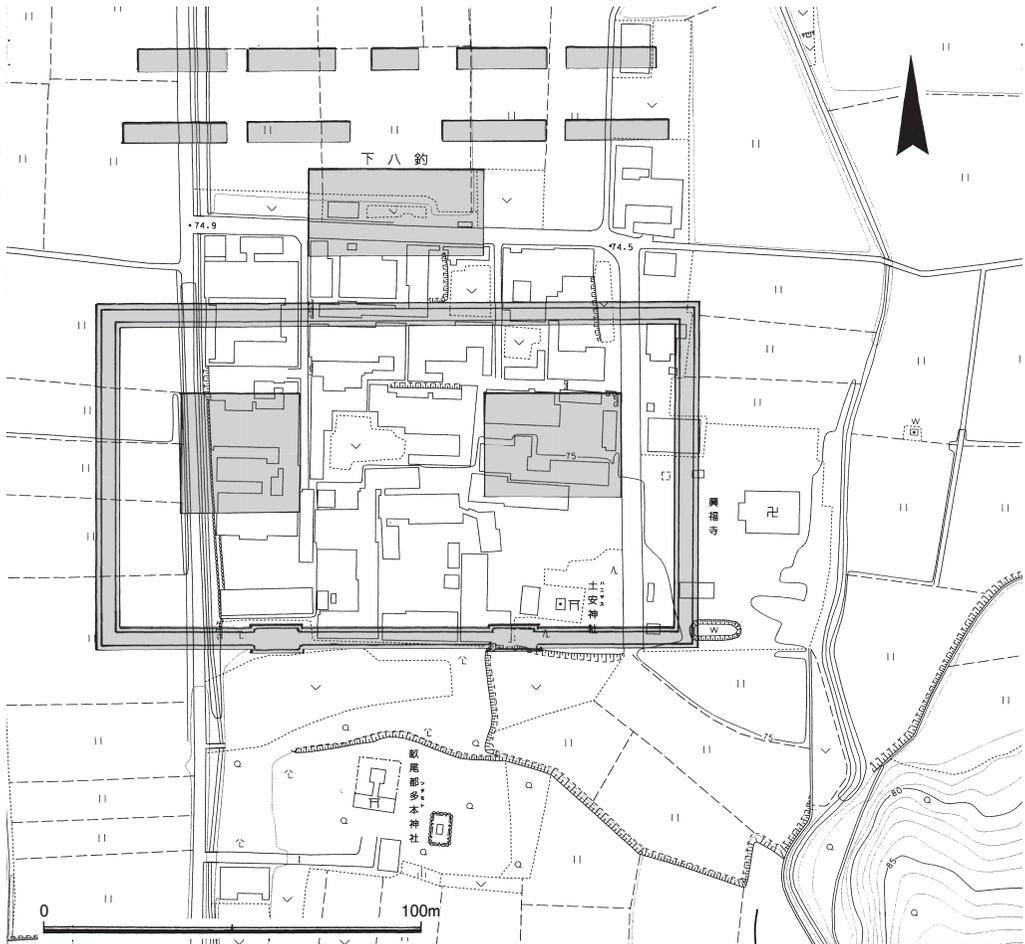


図3 木之本廃寺の想定復元（奈良文化財研究所発行「高殿」に加筆）

社として残ることはよくある。下八釣集落には興福寺（八釣山地蔵尊）と土安神社がある。しかし、これも古代寺院の痕跡とするには物証が足りない。唯一、興福寺境内に方形の柱座を造りだした花崗岩礎石が残っていることは、周囲に礎石を使った建物があったことを示唆している²⁾。

ここでもうひとつの視点として、集落内の地割に注目する。集落内には3本の南北道路がある。東の南北道路は、後に拡幅されて道幅が広いが、中央と西側の南北道路は2.8 m程度と狭い。この中で中央の南北道路は、北から40 mで鉤の手に折れ曲がりさらに20 m進むと、再び僅かに鉤の手に曲がり、さらに10 mで東に折れて、土安神社前の駐車場に至る。東西の南北道路とは異なり、中央南北道路の南半は不自然屈曲を繰り返している。ここに土壇があったため、このような迂回措置をとったとも考えられる。集落内で古代寺院の土壇があったため、道路が迂回することは、奥山集落内の奥山廃寺の講堂や飛鳥集落内の飛鳥寺講堂などでもみられることから、すでに土壇としての高まりは残っていないが、地割として残される事例がある。このように考えてよければ、先の礎石は、その地割りの東隣接地に現在は置かれていることになる³⁾。

この想定のもと、木之本廃寺の伽藍を復元してみるが、木之本廃寺の伽藍配置については、推定する手がかりがない。吉備池廃寺の建物が、他の寺院よりも巨大で伽藍も大きかったことはすでにみた。その建物が解体されて高市大寺に移されたとすると、現状では同じ伽藍配置を想定するしかなく、他の配置を推定する手がかりはない。そこで、先の地割を金堂跡として吉備池廃寺の伽藍を重ねると、塔の西辺が現在の市道に、東辺が西の南北道と重なる。また北面回廊想定地には西の南北道と中央の南北道を接続する東西道（幅1.4 m）が重なることになる。さらに南回廊想定地は土安神社南辺にあたるが、現況ではここに東西に延びる土塁状の高まりがある。この高まりが後世のもの可能性もあるが、位置的には興味深い⁴⁾。

5 高市大寺と条坊の関係

ここで課題となるのは、藤原京条坊遺構との関係である。高市大寺は天武2年（673）に移建造営が始まっていることから条坊区画の影響を受けなかったことは明らかである。しかし、天武5年（676）に周辺において条坊が施工されはじめると、多少なりとも、高市大寺域の計画変更あるいは、条坊道路の規格変更が予想される。

ここで、周辺の条坊遺構の検出状況のみておきたい。まず南北道路では、東二坊大路が五条条間路との交差点で確認されている（178-3次）。東二坊大路は藤原宮の東辺を画する道路で、南北に貫通していたのは明らかである。東三坊間路は六条大路と六条条間路の間で確認されるが、六条条間路以北では確認できていない（50次）。ただし造営期の塀が条坊推定地に沿うことから、削平されたものと推定されている。東三坊大路は現在の中の川がほぼ踏襲されているので、確認できない。一方、東西道路では、五条条間路が東二坊大路との交差点で確認され（178-3次）、その東方80 mでも両側溝が見つかった（108-6次）。五条大路は、市道拡幅の断面調査で北側溝推定位置で溝状遺構を確認している（21-2次）。しかし、南側溝推定地においては、東西溝を確認していない（45-3次）。六条条間路は45・47次で長距離にわたって確認されている

ここで課題となる条坊道路がいくつかある。まず、五条条間路は75-10次で確認できなかったものの、東二坊大路との交差点や108-6次で両側溝が確認されていたことから、中の川まで貫通

していたとみてよいであろう。ただし、この場所は、吉備池廃寺の伽藍をトレースするならば、僧房地域にあたることから、関連する坪を越えた北側に配置された可能性も想定できる。

次に、五条大路であるが、市道拡幅の断面調査で北側溝推定位置で溝状遺構を確認している。この五条大路は想定される塔と南回廊の間を通過することになるので、果たしてここに五条大路が施工されたのかは慎重になりたい。しかも 21-2 次の断面調査であったことから、五条大路の確実な遺構の確認が必要であろう。このように考えるならば、五条大路が計画地より南にずらして、畝尾都多本神社のすぐ北側に設定することも一案であろう。一方、南北道路で課題となるのは、東三坊坊間路である。この南北道路は、計画では伽藍内でも塔を縦断する位置にあたる。しかし、50 次でも六条条間路以北では、道路が確認できず、五条大路がずれるとそこで止まる可能性もある。ただし、東三坊坊間路は南面回廊西門の位置にあたることは、興味深い。

高市大寺の中心伽藍は藤原京の条坊によると、東二坊大路と東三坊大路（中の川）、五条大路（やや南にずれる）と五条条間路に囲まれた中（東西 250 m、南北 130 m 程度）に、中心伽藍があったと推定する。ただし五条条間路以北にも関連施設が展開していた可能性は十分に考えられる。

VI 総括—高市大寺の史的意義—

本稿では、高市大寺のこれまでの推定地について、文献史料と考古学的成果を合わせて検討した結果、木之本廃寺が現状では最も有力であると考えた。ここに高市大寺を推定できることによって、高市大寺の歴史的な意義を検討する。

天武 2 年に百済大寺が高市の地に遷ることは、天武天皇が飛鳥へ凱旋し即位した年であることから、飛鳥遷都に伴う一連の措置であることは間違いない。飛鳥の王都内に国家寺院が必要であり、天武天皇が舒明・斉明・天智の皇統を継ぐことを可視的に示す必要があったのであろう。その移転先が飛鳥中心部ちかくではなく、香具山西麓の木之本廃寺であることは、なぜであろう。この地域に方形街区をもつ「新城」造営は天武 5 年である。即位時には、天武天皇の頭のなかでは、藤原地域に新市街地「新城」の構想があったとみなければならない⁵⁾。そのため高市大寺を後に新市街地が形成される地域に遷したのである。ただし、まだ方形街区の計画は出来ておらず、条坊遺構との整合性はとれていない。さらに藤原宮との位置関係からも、不都合であったのだろう。もうひとつの理由は、物理的な理由として、百済大寺から木之本廃寺までは、米川（百済川）と中の川（狂心渠）を使えば、物資の輸送の便が図れることである。このことは、次の大官大寺も中の川で繋がっており、寺域東辺にバイパス運河を造っている。

では、なぜ文武朝に大官大寺を新造したのであろうか。これは従来からいわれているように、「新益京」の国家寺院としてふさわしい位置と伽藍と規模の寺院が必要だったのであろう。大官大寺は百済大寺・高市大寺よりも大規模な堂塔と伽藍をもち、藤原宮南方の東西に、薬師寺と大官大寺を対で配置した。その伽藍配置は高市大寺（おそらく吉備池廃寺とおなじ伽藍配置）の法隆寺式ではなく、九重塔をふたつ配置した双塔式の新伽藍（大官大寺式）と新様式の瓦（大官大寺式）を採用したと考える。大官大寺造営の計画は、天武 10 年頃の「新益京」造営計画の中で構想されたと思われるが、天武末年には藤原宮の造営が急がれており、それが一段落した文武朝まで、

造営開始がずれ込んだとみる。その間、高市大寺が、国家筆頭の官寺としての役割をにっていたが、伽藍配置は旧様式であり、藤原宮のすぐ東に条坊区画と整合性のとれない高市大寺では、「新益京」の国家寺院としては不都合であった。

しかし、大官大寺は造営開始後 10 年にして、建築途中で焼失、しかも都は平城京へ遷った。大官大寺の未使用の建築資材は大安寺へと遷され、百済大寺から高市大寺に移されていた仏像が大安寺に施入されている。結果的に、平城京遷都までは高市大寺が藤原京の国家筆頭官寺としての役割を担い続けることになった。大官大寺は、幻の大寺であったのである。

注

- 1) このように考えると、藤原京左京六条三坊の奈良時代以降の遺構群は、高市郡に含まれないことをもって、「香具山正倉」の可能性を否定されているが（奈文研 2017）、高市郡に含まれる可能性があるのもその可能性が浮上する。
- 2) この礎石が藤原宮の宮城門の可能性もあるが、東面南門からは 300 m の距離があり、東面中門の礎石には方形柱座の造りだしは見られなかったので、宮城門の礎石の可能性は低いと考える。
- 3) 木之本廃寺の伽藍が下八鈎集落に重なるのならば、地名から遺跡名は「下八鈎廃寺」の方が適切かもしれないが、まだ確認されたわけではなく、これまでの研究史からも混乱を招くので、ここでは「木之本廃寺」と呼んでおく。
- 4) 今回の伽藍想定地において、いくつかの調査が行われている。金堂想定地では中世の南北溝が確認されているだけで、基壇の痕跡は確認されていない（91-3 次）。また北面回廊に重なる地では、現地表から 50cm で地山が確認されている（188-2）。市道の西側では、南面回廊で重なる地では回廊遺構や五条大路南側溝のいずれも確認されていない（45-3 次）。西面回廊想定地では湿地となっており、遺構はみられない（83-8 次）。これらの状況から、伽藍の存在を積極的に肯定することはできないが、同時に否定もされないと考える。
- 5) 筆者は天武 5 年の「新城」を飛鳥北西部に新たに計画した方形街区をもつ新市街地と理解し、天武 10 年頃にこれを東西北に拡大整備して、中央に王宮を配置する「新益京」を計画・造営開始したと考えている（相原 2017）。

参考文献

- 相原嘉之（2017）：『古代飛鳥の都市構造』吉川弘文館
- 相原嘉之（2020）：「初期寺院の創建－7 世紀前半における古代寺院の造営－」
『明日香村文化財調査研究紀要 第 19 号』
- 明日香村教育委員会（1997）：「藤原京左京十條三坊の調査」『明日香村遺跡調査概報 平成 7 年度』
- 網干善教（1980）：『古代の飛鳥』学生社
- 猪熊兼勝（1980）：「瓦と埴」『高松塚と藤原京』学習研究社
- 近江俊秀（1998）：「吉備池廃寺は百済大寺か－百済大寺と高市大寺の所在地をめぐって－」
『シンポジウム吉備池廃寺をめぐって－百済大寺はどこか－』帝塚山大学考古学研究所
- 大脇 潔（1995）：「大安寺 1－百済大寺から大官大寺へ－」
『シンポジウム 古代寺院の移建と再建を考える』帝塚山考古学研究所
- 大脇 潔（1997）：「蘇我氏の氏寺からみたその本拠」『堅田直先生古希記念論文集』真陽社

- 大脇 潔 (1998)：「『百済大寺』の行方をめぐって」
『シンポジウム吉備池廃寺をめぐって－百済大寺はどこか－』帝塚山大学考古学研究所
- 大脇 潔 (2005)：「大野岡北麓の池と飛鳥川の堰」
『飛鳥文化財論攷－納谷守幸氏追悼論文集－』納谷守幸氏追悼論文集刊行会
- 小澤 毅 (1995)：「小墾田宮・飛鳥宮・鳥宮－七世紀の飛鳥地域における宮都空間の形成－」
『文化財論叢Ⅱ』奈良国立文化財研究所
- 小澤 毅 (1997)：「吉備池廃寺の発掘調査」『仏教芸術 235号』毎日新聞社
- 小澤 毅 (2003)：「寺名比定とその沿革」『吉備池廃寺発掘調査報告－百済大寺跡の調査－』
- 小澤 毅 (2019)：「高市大寺の所在地をめぐって」『古代寺院史の研究』思文閣出版
- 風間亜紀子 (2010)：「高市大寺関係史料の再検討－その所在地をめぐって－」
『川内古代史論集 第7号』東北大学古代史研究会
- 木下正史 (2005)：『飛鳥幻の寺、大官大寺の謎』角川書店
- 佐川正敏・西川雄大 (2000)：「奥山廃寺の創建瓦」『古代瓦研究Ⅰ』奈良国立文化財研究所
- 田村吉永 (1960)：「百済大寺と高市大寺」『南都仏教 第8号』南都仏教研究会
- 田村吉永 (1965)：『飛鳥京藤原京考証』綜芸舎
- 中井 公 (1995)：「大安寺2－大官大寺から大安寺へ－」
『シンポジウム 古代寺院の移建と再建を考える』帝塚山大学考古学研究所
- 奈良県立橿原考古学研究所 (2019)：『大和国条里復原図』由良大和古代文化研究協会
- 奈良文化財研究所 (2003)：『吉備池廃寺発掘調査報告－百済大寺跡の調査－』
- 奈良文化財研究所 (2017)：『飛鳥・藤原宮発掘調査報告Ⅴ－藤原京左京六条三坊の調査－』
- 西本昌弘 (2011)：「高市大寺（大官大寺）の所在地と藤原京朱雀大路」『古代文化 63-1』古代学協会
- 星野良史 (1985)：「高市大寺・大官大寺の造営過程」『法政考古学 第10集記念論文集』法政考古学会
- 森 郁夫 (1998a)：『日本古代寺院造営の研究』法政大学出版局
- 森 郁夫 (1998b)：「百済大寺－吉備池廃寺をめぐる問題点－」『帝塚山大学考古学研究所研究報告Ⅰ』
- 吉川真司 (2013)：「小治田寺・大后寺の基礎的考察」『国立歴史民俗博物館研究報告 第179号』

Abstract

Daianji Temple is the leading government temple in Heijokyo (Nara). The birth and development process of national temples is important in considering the role of temples in the formation of the nation. This national temple became Daianji after passing through Kudara-no-odera, Takechi-no-odera and Daikandaiji. Thus far, the locations and building arrangements of Kudara-no-odera, Daikandaiji, and Daianji have been clarified, but those Takechi-no-odera have not as yet been identified. Therefore, the elucidation of Takechi-no-odera is an important position in the genealogy of the national temples. In this paper, the location of Takechi-no-odera Temple is identified based on historical documents and the results of archeology, and its historical significance is examined.

Keywords : Kudara-no-odera, Takechi-no-odera, Daikandaiji, Daianji

